

A B r i e f N o t e N o . 1 8 1

発行日：2007.7.1

発行人：Matsuo Masayasu

国宝 吉備津神社の本殿葺き替え工事をみる

八千代市 松尾 昌泰

1. はじめに

両親の法事を行うため吉備路の総社に帰省した。帰省前に次男から、吉備路の吉備津神社本殿・拝殿が工事中で、国宝の現場を見学できると聞いた。早速インターネットで調べたら、50年に1回の屋根の葺き替え工事中であり、6月の土曜日だけは公開しているとのことだった。工事中の国宝の現場は、もう2度と見ることはできないので、見学してきた。

2. 国宝建造物 吉備津神社（とは）

吉備津神社は、古くから吉備国の総祖神として信仰を集めている神社であり、国宝である本殿・拝殿をはじめ、鳴釜神事という民俗信仰を残す御釜殿など、多くの文化財建造物がある。（この2枚の写真は工事前のもの、）



右部分が拝殿で、対の入母屋の部分が本殿



斜めから見ると実に美しい

3. 特徴ある本殿・拝殿

神社建築としては非常に規模の大きく（建坪 78 坪強の大建築）、本殿と拝殿が一体となっている複合社殿である。

本殿・拝殿は、写真でも分るように、「比翼入母屋造」(ヒヨクイリモヤヅクリ)という、他に例を見ない独特な形の屋根を持っている。

即ち、入母屋の千鳥破風を前後に二つ並べ、同じ高さの棟で結び桧皮で葺き、ひとつの大きな屋根にまとめた構造で、上から見ると棟はカタカナの「エ」の字型になっている。

この『比翼入母屋造』は、全国で唯一の様式であり、単に『吉備津造り』とも云われている。この姿は、実に美しく、そして落ちついているでしょう！

本殿・拝殿は過去 2 回の火事によって焼失してはいるが、写真の本殿・拝殿は今から約 600 年前の室町時代、将軍足利義満の時代に約 25 年の歳月をかけて 1425 年に再建された。それ以来、解体修理もなくその姿を今に伝えている。

4 . 葺き替え工事（保存修理）

昭和 30 年の檜皮葺屋根の葺き替え工事から約 50 年の歳月が過ぎ、檜皮は（耐用年数も超え）老朽し、一部では檜皮が剥がれて下地が見えるなど、痛みは深刻だったそうで、今回の屋根葺き修復工事は、平成 17 年春より開始され平成 20 年 9 月まで行われるそうです。



平葺 と 軒付



野垂木

檜皮葺きは、まず軒先に「軒付（ノキツケ）」という皮（左上の写真の右）を厚く積み、そのから屋根の面全体に「平葺（ヒラツケ）」という皮（同写真の左）を葺き上げていくそうです。この平葺の 1 枚は、長さや区 90cm、幅 15cm、厚さ 1.5mm で、これを 1.2cm ずらしながら重ね並べていき、竹釘で止めながら下から上へと葺いていく工事で、気が遠くなる。結果的には 57 枚ほどの檜皮が重なり、厚さは 12cm になるとのことです。



軒付



よくわかる比翼入母屋造

5・吉備路のシンボリック存在の備中国分寺

最後に、備中国分寺に触れておきたい。古代吉備国は、出雲や大和と並んで栄えた所で、その中心が「吉備路」です。吉備路には吉備津神社のほかにも文化財や史跡が多く、その1つが「備中国分寺」。この国分寺にて、父の17回忌と母の3回忌の法要を行った。もともと奈良時代に建立された備中国分寺は焼失し、現在のものは江戸時代中期に再建されている。

境内にそびえる五重塔は、吉備路のシンボリックな景観となっており、その高さは約34mであり、下の写真のように、屋根の上層と下層がほぼ同じ大きさです。塔内には、中央に一本の心柱があり、これで塔を支えている。幼い時に父親に連れられて行った時に、和尚さんに内部を見せてもらった記憶がある。心柱の記憶はあるが、塔内には彩色画など絵が104枚あるそうであるが、この記憶は全くない。再び、何かの機会に見学したいと思っている。



備中国分寺の五重塔

以上